

御嶽の噴火について

御嶽の噴火は戦後最悪という人的被害が出てしまいました。前回のニュースレターで、あたかも気象庁の観測精度が悪かったような印象を与えてしまいましたが、実はデータそのものは正確なのですが、気象庁は火山性地震を別に数えていたことがわかりました。また名古屋大学のデータは気象庁にも届いており、やはり今回の災害は情報伝達の問題が大きかったと考えています。

すぐ出来る事として、例えば御嶽に限らず各火山の活動を示す火山性地震の数などは気象庁や防災科学技術研究所のホームページだけでなく、やはり登山者が一番確認するであろう観光用のポータルサイトにリンクする事です。またそれに伴い、啓発的なページを整備することが同時に求められます。

さらに火山性微動が観測された場合には（今回の場合7分ほど前でしたが）、緊急地震速報ならぬ、緊急火山速報を各火山の山頂をカバーする携帯電話の基地局から流す事も、技術的にはすぐ実現可能です。観光当局もできるだけ情報を開示する事が積極的な安全につながり、ひいては観光客の誘致にも効果的である事を認識すべきだと思います。もし、「現在御嶽は普段と違う状態で、噴火の危険性が高まっている」という知識をもって入山していれば、登山者の最初の1分間の行動が全く違っていたと推察されます。

火山監視については、すでに文科省も動き出していますが、そのために色々な緊急アンケートが大学等の機関に要求されています。また地震計やGPSなどのハードの整備だけが進みそうで、肝心の監視業務および研究者のための予算は考えられていないようです。研究は人間がするものなのです。

日本列島陸域の地震に関する新たな解析を開始しました

地下天気図は気象庁や防災科学技術研究所が公開している地震カタログ（いつ、どこで、どれくらいの地震が発生したのかを記載したリスト）を元に計算しています。現在、ほとんどの地震計は陸域に配備されており、陸と海とで、地震の検知能力に大きな差があります。

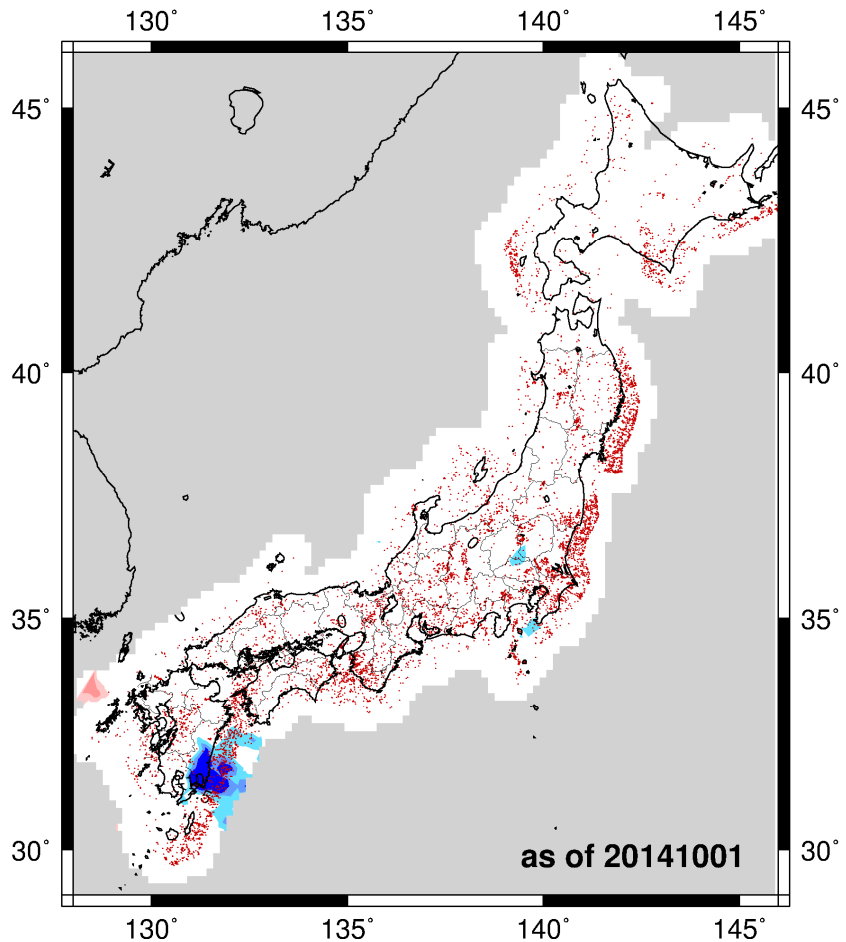
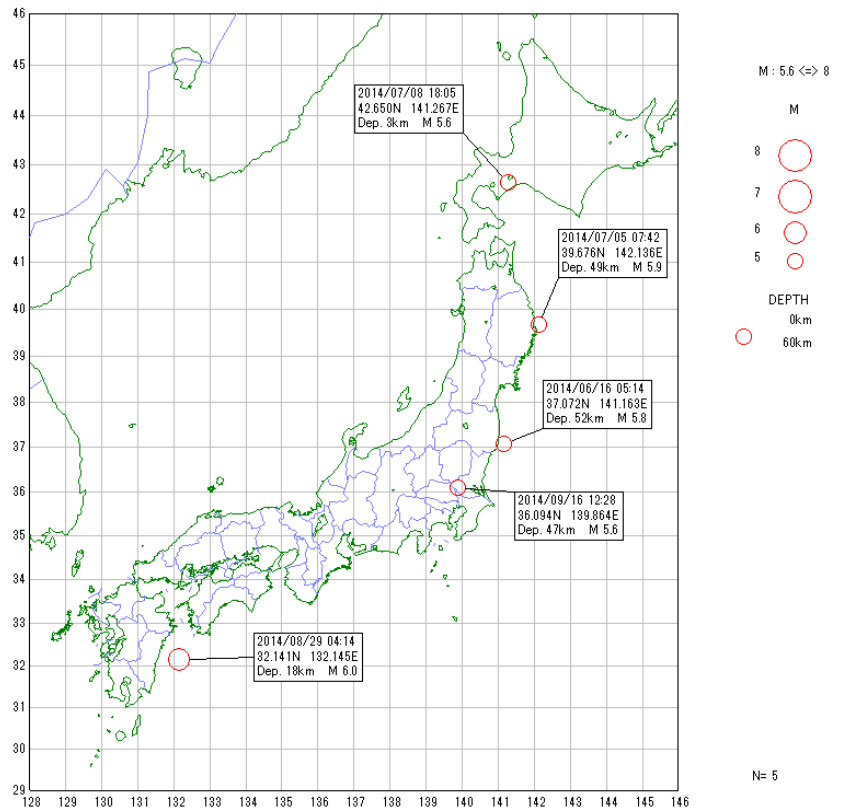
たとえば陸域ではマグニチュード1.5という体に全く感じない地震をほぼ100%検知しています。しかしながら、たとえば東北沖合や小笠原あたりではマグニチュード3.5以上位にならないと100%の検知が難しい状態です。一般的に地震のマグニチュードが1小さくなると10倍の数の地震が発生します。たとえばM3の地震が100個発生していれば、M4は10個、M5は1個という割合で発生するのです。そのため、陸域ではより細かい解析が可能となり、我々に最も影響の大きいいわゆる都市直下型地震の解析に有利な状況です。

さらに、311を契機に日本列島全体の地震発生様式（地震の起き方）に大きな変化が生じており、311以前と以後に分けて解析を行ってみました。

そこで、陸域の地震だけを選択して、今年の陸域だけの地下天気図のアニメーションを作ってみました。参考として今年に入ってからM5.6以上の全ての地震の図も示したいと思います。

今後、このような解析も進化させていきたいと考えております。

今年陸域ないし海岸線付近で発生したM5.6以上のすべての地震最大のものは宮崎県沖で8月29日に発生したM6.0で、M6を超えたのはこの1つだけです。



10月1日時点の地下天気図.

今年のアニメーション（1ヶ月ごとに計算）は

http://www.sems-tokaiuniv.jp/DuMA/Japan_land.gif でご覧ください。マックの場合 Safari が好適です。中部地方に頻出していた異常と御嶽の噴火の関係は不明です。